
 学 会 記 事

第38回新潟化学療法研究会

日 時 平成11年6月19日(土)
PM 4:00~
会 場 新潟東映ホテル 1F
白鳥の間

I. 一般演題

1) 抗菌薬のアレルゲン性の検討

八木 元広 (水原郷病院 薬剤科)

【目的】抗菌薬のアレルギー性副作用は発現頻度が高く、化学療法に大きな障害となっている。そこで経口抗菌薬のアレルゲン性を臨床および基礎の両面から比較検討した。

【方法】臨床では、当院の過去(H3.1~H8.12)の全経口抗菌薬服用患者19,944例を対象に、アレルゲン性(=白血球遊走阻止試験陽性例数/抗菌剤服用例数)を検討し、基礎ではモルモットを用い化学物質の接触感作性を評価するのに有用な Maximization test (MT)を行った。

【結果】経口抗菌薬のアレルゲン性は、全体で0.271% (54/19944)で、薬剤分類別ではβ-ラクタム系薬剤が0.240%で、そのうちペニシリン系薬剤が0.486%、セフェム系薬剤が0.171%で、キノロン系薬剤0.043%、マクロライド系薬剤0.136%、テトラサイクリン系薬剤0.418%、その他の抗菌薬1.408%であった。抗菌薬間の比較では、β-ラクタム系薬剤、またその内セフェム系がキノロン系薬剤に比べ有意に高いアレルギー発現率を示した。また、β-ラクタム系薬剤の中のペニシリン系がマクロライド系薬剤に比べ有意に高い発現率を示した。

また、MTではβ-ラクタム系薬剤が陽性を示したのに対し、キノロン系薬剤は1/4例にしか陽性を示さず、皮膚反応の平均スコアもβ-ラクタム系薬剤が20.8に対しキノロン系薬剤は3.2であり、β-ラクタム系薬剤に比べキノロン系薬剤が有意に低いアレルゲン性を示した。

【結論】以上臨床および基礎的検討から、キノロン系薬剤はβ-ラクタム系薬剤に比べ細胞性免疫関与のアレルゲン性が低いと考えられる。

2) アルベカシン血中濃度解析の応用

継田 雅美 (新潟市民病院 薬剤部)
吉川 博子 (同 内科)

アルベカシンの血中濃度測定・解析を行なった症例から、その意義と問題点を考察した。

解析の目標血中濃度はピーク値7μg/ml以上12μg/ml以下、トラフ値2μg/ml以下とし、2点採血の測定後日本人母集団パラメータを用い、2-コンパートメントモデルで解析を行なった。症例の評価については、効果はCRP・白血球数・菌の減少から、副作用は血清クレアチニン値などから判断した。解析は7症例に行われた。解析によりトラフ値をおさえながらピーク値を十分にあげることができたため副作用なく効果がみられた症例があり、血中濃度測定・解析は有用であると思われる。しかし、前回の測定値からは予測できない血中濃度が測定された例があった。アミノグリコシド系薬剤の血中濃度は特に病態や併用薬剤、点滴時間や採血時間の違いに影響されるため、測定値の判断には注意が必要である。

3) *Candida albicans* 分離株の性状に関する検討

二宮 一智・又賀 泉 (日本歯科大学 新潟歯学部口腔 外科学第二講座)
青木 茂治 (同 総合研究センター R1施設)

C. albicans は健康者の口腔からは約30%の頻度で分離され、口腔常在菌の一種と考えられており、通常は病原性を発揮することはない。しかし、宿主の感染に対する抵抗性がなんらかの原因で低下すると口腔内粘膜に感染を起し口腔カンジダ症を発症させる。したがって本真菌は口腔領域の日和見感染起因菌として、きわめて重視されている。

口腔カンジダ症の主な起因菌とされる *C. albicans* をさらに細かい細胞生物学的性状で生物型 (biotype) の差で鑑別できれば、カンジダ感染の疫学的解析が可能

となると考えた。今回、日本（新潟市）、中国（合肥市）、イタリア（トリノ市）、ペルー（クスコ市）で分離された *C. albicans* 株の生物型を糖利用パターンおよびキラ酵母法で調べるとともに、病原性因子とされているプロテアーゼならびにホスフォリパーゼ産生能を調べ、これらの性状を明らかにすることを試みた。

4) 増殖性の臨床所見を示した口腔カンジダ症の2例

南部 弘喜・二宮 一智（日本歯科大学
新潟歯学部口腔
外科学第二講座）
又賀 泉
久和 彰江・仲村健二郎（同
総合研究センター
R1施設）
青木 茂治

<緒言> *Candida* は口腔内の常在菌として知られており、口腔カンジダ症の起原菌として知られている。今回、我々は口腔癌術後の移植皮弁に腫瘍再発を疑わせる増殖性の病変を認め、病理組織学的検査においてカンジダ症と診断した2症例を報告する。

<症例1> 70歳 女性。1996年2月20日某病院にて左側頬粘膜腫瘍摘出術、1996年3月13日 D-P 皮弁による再建術を施行。1996年4月30日、口唇閉鎖不全、開口障害、左側口角瘢痕拘縮症、上下顎義歯不適を主訴に当科紹介来院される。1996年10月8日、移植皮弁上に腫瘍様の増殖性の病変を認めたため biopsy 施行、病理組織学的検査にてカンジダ症の診断を得た。フルコナゾール投与1週間後、症状の改善傾向を認めた。現在、経過観察中で症状の再燃を認めず。

<症例2> 63歳 女性。1986年8月ごろより左側舌側縁部に違和感を認めたが放置、1987年2月25日当院紹介来院する。1987年3月3日 biopsy 施行、扁平上皮癌の診断を得た。1987年腫瘍摘出術、広背筋皮弁による舌再建術施行。経過観察を続けていたが1997年4月9日、左側口底部粘膜と再建皮弁境界部に腫瘍様肉芽を認めた。1997年4月21日 biopsy 施行、組織学的検査にてカンジダ症の診断を得た。現在、経過観察中で症状の再燃を認めず。

<考察> 以上の2症例は、口腔内に移植皮弁を用いており、通常口腔カンジダ症とは、臨床的にも異なった所見を示した。稀な症例と考えられる。今回、病理組織学的に若干の検討を加えて発表した。

5) 喀痰から *Aspergillus species* が分離された症例についての臨床的検討

西堀 武明・牧野 真人
川崎 聡・村山 直也
塚田 弘樹・長谷川隆志
五十嵐謙一・鈴木 榮一（新潟大学）
荒川 正昭・下条 文武（第二内科）
尾崎 京子（同
附属病院検査部）

【目的と方法】 喀痰からアスペルギルスが検出された際に治療を必要とするか否かは、臨床問題となる場合も多い。

1996年から1998年まで、当院検査部細菌検査室で喀痰からアスペルギルスが分離培養された症例について基礎疾患毎に分類して検討を行った。

【結果と考察】 悪性腫瘍群は16例であり、半数以上の10例が死亡していた。膠原病や間質性肺炎の症例は20例であり、ステロイド治療を行っている症例が多く、8例が死亡していた。これらの群でアスペルギルスが検出された場合の予後は AMPH-B 等の抗真菌薬で治療していた症例も含めて不良である傾向がみられた。

また、気道病変をもつ症例は23例あり、抗真菌薬を使用する頻度は他の群と比較して少なかったが死亡例は1例のみであった。この群では、アスペルギルスが colonization している場合も多いと考えられた。

6) 眼感染症における嫌気性菌の検出状況 (1995～1998年)

宮尾 益也（新潟大学眼科）
大石 正夫（白根健生病院眼科）

目的：眼感染症の原因菌の現況を知る目的で、当科で分離された嫌気性菌について検討した。

方法：1995～1998年に受診した眼感染症患者を対象とした。菌の培養、同定、薬剤感受性は中央検査部細菌検査室で行われた。

結果：94名から、109株が検出され、全検出菌の21.2%を占めた。内訳は *Propionibacterium* 90株、*Peptostreptococcus* 4株、*Prevotella* 3株、*Actinomyces*、*Fusobacterium* 各1株が同定された。

症例は60歳以上が43.6%を占め、男性39.4%、女性60.6%であった。

疾患は結膜炎34例、角膜感染症26例、涙嚢炎17例、眼瞼炎7例等であった。

嫌気性菌単独で検出されたのは全体の42.6%、なんらかの基礎疾患を有したものは78.7%であった。